



地域安全マップづくりのポイント



☆ 危険な場所とは「入りやすい場所」「見えにくい場所」 ☆

「犯罪がおきた場所」や「変な人がいた場所」を地図上を書くだけでは、犯罪から身を守る力は伸ばせません。そこに近づかないようにすることはできても、知らない場所では、どこが危険な場所なのか分からないからです。

どこに行っても犯罪にあわないようにするためには、自分で危険な場所を発見できるようにしなければなりません。地域安全マップづくりで見つけてほしい「危険な場所」とは、「入りやすく見えにくい場所」です。

例えば、どこからでも入れる公園は「入りやすい場所」です。植物が邪魔をして、子どもが遊んでいる姿が見えない公園は「見えにくい場所」です。ガードレールがない歩道は、車を使った犯罪者にとっては「入りやすい場所」です。塀が高く、家の中から通行人が見えない歩道は「見えにくい場所」です。

また、落書き、散乱ゴミ、放置自転車などが多いと、そこは、犯罪者にとって、「入りやすく見えにくい場所」になります。近所の人が無関心で、管理ができていない場所は、悪い人に、「犯罪を実行しても見つからないだろう」「見つかったも通報されないだろう」と思わせてしまうのです。

(参照：【立正大学教授(犯罪社会学)小宮信夫著「地域安全マップ作成マニュアル」】)

地域安全マップでは、「入りやすい場所」そして「見えにくい場所」を発見しながら、地図をつくりましょう。

※ 実際に犯罪がおきた場所を地図上に書いた「犯罪発生マップ」や、変な人がいた場所を地図上に書いた「不審者出没マップ」にならないように注意しましょう。

☆ 割れ窓理論 ☆

「割れ窓理論」とは、アメリカの犯罪学者ジョージ・ケリング博士により提唱されたもので、1枚の割れた窓ガラスを放置すると、割られる窓ガラスが増え、その建物全体が荒廃し、いずれ街全体が荒れてしまうという理論です。

1つの無秩序を放置すると、地域社会の秩序維持機能が弱まり、犯罪は増加するというもので、小さな芽のうちに摘むことが大切だということを説いています。

(引用：【(公財)茨城県防犯協会「防犯ボランティア活動のしおり」より】)

地域安全マップづくりでは、こうした割れた窓ガラスが放置されているような場所(地域が無関心な場所)がないかを確認することも必要です。